

「産農人」とは農作物をつくるだけでなく、市場ニーズを理解し流通させることのできるマーケットセンスを持った新しい農業人を表す造語。横須賀商工会議所と地域の農家・加工業者・飲食店・メーカーが丸となって、将来の農業を担う有用な人材の育成に取り組んでいます

Starting a challenge

「畑からはじまる商品開発。就農は本気の挑戦」

産農人4期生 須田萌愛さん



「産農人」4期生の須田萌愛さんが卒業後の進路に就農の道を選んだ。産農人アドバイザーの鈴木優也さんが営む「鈴也ファーム」の従業員として、新たな気持ちで農業と向き合うという。決意したきっかけと期待に胸を膨らませる今の心境を聞いた。

——農業に興味を持つきっかけは？

「幼少期から土いじりと生きものが好きでした。農業高校を撰んだのはそんな単純な理由から。将来の職業として深く考えていなかった気がしますが、『産農人』の活動を通じて、意識が大きく変わりました」

——それはどういったことですか？

「(産農人では)野菜作りだけでなく、加工食品の開発や販売体験など次から次へと課題を与えてもらえます。これがないでもやってみたい自分の私に合っていました。農業は畑だけのイメージでしたが、6次産業化など仕事の幅の広さに驚かされました。実際に取り組むアドバイザーの姿を間近で目にしたことが就農を決断するきっかけになっています」

——「産農人」の活動で印象深い出来事は？

「メンバーの繪音と」

——農業に対する将来の不安はありませんか？

「担い手不足や高齢化の問題があると聞いていますが、自分のできる範囲で力になればいいと思っています。就農した自分が若い世代に向けて農業の楽しさや魅力をSNSで発信していく。仲間を増やしたいですね」

——将来の夢を聞かせてください。

「お世話になる優也さんは、自身が手掛けた農作物を様々なアイデアで商品に変化させており、理想とする姿です。これを目標に本気で挑戦したいと思っています」

農業の新しい価値を生み出す若い力



修了証書を手にする4期生と「産農人」の支え手たち

三浦初声高校都市農業科の生徒が参加する「産農人育成プロジェクト」の令和4年度活動報告会が2月9日、横須賀商工会議所で開かれ、1年間の学びの成果を発表した。今年度は生産班(露地栽培・ハウス栽培/菌床栽培)と加工班に分かれ、各自が学びたい分野を選択する形で技術と知識の習得に励んだ。生産班ではマグロの残渣を肥料にしたサツマイモの栽培や菌床を叩く手法でしいたけの収穫量をあげる実験など新しい取り組みが行われた。加工班では茄子を用いたスイートパイの開発といったチャレンジがあった。今春卒業する4期生7人に、平松廣司会頭から修了証書が手渡された。

成果報告会・
修了式

産農人

育成
プロジェクト



平松会頭式辞



4期生3年生の成果報告



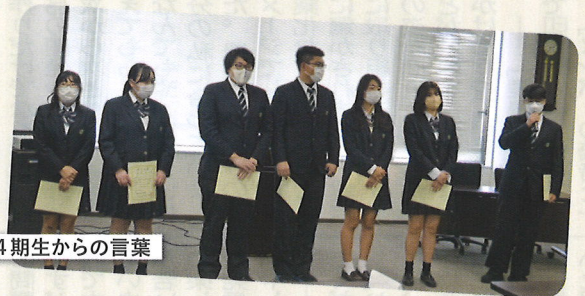
5期生2年生の成果報告



講師たちからの講評



平松会頭から修了証の授与



4期生からの言葉



生徒と講師たち



記念撮影



4期生と5期生